



藤島武二「日の出」 1931 年作

油彩・キャンバス 45.4 × 52.6 cm 藤島武二画集（日動出版 1998 年）No. 344 所載

1928（昭和3）年、昭和天皇の即位の御祝として皇居の学問所に飾る油彩画を貞明皇后より依頼された藤島は、「自分としては是非其日の出の光景を描いてみたいと早くから心に定めていた」「日の出こそは最も日本の国を象徴するに相応しいものであり、特に御登極の御祝いである場合これほど適当な題材は考え得られるべくもないというのが自分の気持ちであった」（『内蒙の日の出』『塔影』1937（昭和12）年9月）と述懐している。

以降10年間に渡り各地の日の出を描き続けた藤島。本作《日の出》は画面手前の近景の描写から、伊勢の朝熊山（あさまやま）からの眺望をもとにしたものと考えられる。水平線上に昇りゆく太陽が、その豊かな光で天地すべてを一つにしたかのような様子。現場で描いた速い筆致で抽象画のように単純化された本作は、後期印象派の作家が描いた太陽や海景の作品群とは一線を画し、自然の循環とその中で一体となつて生きる人間という日本の姿そのものが描かれており、藤島の高い描写力、造形力、色彩感覚が遺憾なく発揮され、格調高い表現へと昇華されている。

本作の制作後も各地で日の出を描き続けた藤島は、最終的にモンゴルでの日の出を題材にした《旭日照六合》を1937（昭和12）年に完成させ、皇居に納めた。

日本の文化史において、その多様性と質の高さでいまや重要な位置づけを持ち始めた近代洋画。自らの作品が日本文化の象徴として後世に長く残るよう制作に尽くし、見事に結実したのが藤島武二の「日の出」である。

東京美術商協同組合

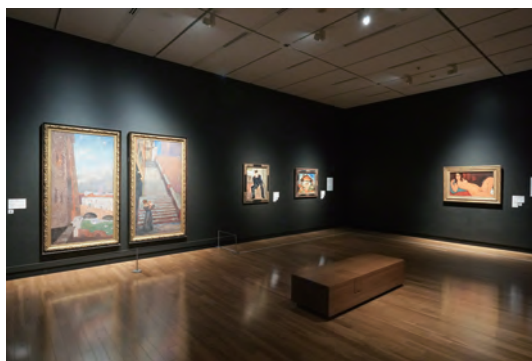
監事 鈴木 庸平

大阪中之島美術館の起点は、昭和58年（1983）に大阪市制100周年記念事業の基本構想のひとつとして「近代美術館の建設」が発案されたところまで遡ります。その後、昭和63年（1988）に構想委員会が発足。市制100周年となる平成元年（1989）には美術品を取得するための基金が設置され、さらに平成2年（1990）は近代美術館建設準備室の開室を見ます。国際文化都市を謳い、「人・魅力・躍動」をテーマにしたこの記念事業はバブル期の高揚感のほか、順調にステップを刻んでいきました。しかし、日本経済の大きなつまずきはやや時間において大阪市の財政を揺さぶり、近代美術館建設準備室は、期せずして準備室のまま30年を超える歴史を重ねることになりました。

30年という歳月は、社会における美術館の在り方を



大阪中之島美術館外観



4階展示室：コレクション特別展示「異邦人のパリ」2025年



5階展示室：サラ・モリスによる壁画《スノーデン》2026年

何度か変えていきました。そしてもちろん、準備室が描く「美術館のあるべき姿」も変化します。一時は計画白紙まで取り沙汰されながらも、大阪らしい土俵際の強さを発揮し、ついに平成26年（2014）、近代の看板を下ろした「新美術館整備方針」が策定され、美術館では日本初のPFIコンセッション方式による民間運営が決まり、美術館の建物の設計コンペが実現すると、これまでの助走距離の長さを打ち消すかのように最短距離で令和4年（2022）の開館まで走り抜きました。

大阪中之島美術館は開館前に4つの「めざす姿」を掲げました。「歴史をつなぎ、未来を創造する」、「情報や知識の、発見や感動の循環をうながす」、「つながりを原動力とする」、「そして「大阪に貢献する」。この4つに通底するのは、「小さく構えること」と「足元を見つめること」です。かつて大規模であらゆる機能



佐伯祐三《立てる自画像》1924年

を内包する構想を抱えていた準備室は、開館までに多くの理想や夢を捨ててきたかもしれないが、それは「足りない」ということが可能性であることを発見するプロセスでもありました。美術館の扉の外にはさまざまな人による、さまざまな活動があり、私たちは自分たちだけで完結しようとするのではなく、誰かとつながり、誰かに助けを求めることで、もっと多くの、想像を超える可能性を拓くことができる実感できました。また、それはまさに美術館が地域の一員であることの確認でした。大阪中之島美術館はこの大阪・中之島から動くことができます。

工+藝2026

当社主催「工+藝2026」(令和八年五月二十一日(木)～二十四日(日))において、下記の通り、各審査員により選定された作品が表彰されました。

また、五月二十二日(金) 夕刻からレセプションが開催され、多くの作家や文化芸術関係の方々が参加されました。



「工+藝2026」レセプション (5月22日)



中村社長挨拶



レセプション会場



ご来場者と中村社長

「工+藝2026」各賞(審査員)

東京美術倶楽部(東京美術商協同組合員・青年会員) 大賞・優秀賞

【大賞】孫苗 《輪花香合 雪花》

【優秀賞】田中里姫 《楚々、憧憬》、橋本雅也 《ニホンスイセン》

秋元雄史(東京藝大名誉教授・美術評論家) 賞

牟田陽日 《蓬茅と名月》

NIGO®(ファッションデザイナー) 賞

田中里姫 《楚々、憧憬》

菊池寛実記念 智美術館(工芸振興活動をする美術館) 賞

高橋奈己 《白磁水指》

山下裕二(美術史家・明治学院大学教授) 賞

伊藤航 《Gears - 拗らせる線 -》



『芸術新潮』全8回連載企画 「東京美術倶楽部はアートの秘密基地」



東京美術倶楽部 玄関看板リニューアル

東京美術倶楽部の「美」シンボルマークは、記録では1952年の社旗製作が初出という伝統あるマークですが、2025年の和・英文の社名ロゴ制定とともに正式なデザインが確定され、本年4月に玄関看板リニューアルを完了しました。

新潮社『芸術新潮』2026年5月号

(「特別企画「プロVSプロ、交換会いまむかし」より)

「工+藝」2026

令和八年五月二十一日(木)～二十四日(日)に開催された東京美術倶楽部主催の企画催事「工+藝2026」。

本催事は、現代日本の優れた工芸作品を、国内はもとより世界に発信するべく、実行委員会が厳選した招待作家七名・推薦作家五十名の力作の展示・販売が行われました。

そして、東京美術商協同組合員・青年会員各位の投票による「東京美術倶楽部大賞」等の作品が選定され、対象作家各氏が表彰されました。

本催事は、SNS・動画・デジタル広告等を強力に展開し、国内外から約二、三五〇名のお客様をお迎えして盛会裡に終了しました。

尚、本年十一月五日(木)～八日(日)に京都の妙顕寺で「工+藝」2026京都を開催予定です。



ポスター



秋元雄史氏ギャラリーツアー



会場入口



展覧会場



東京美術倶楽部大賞 授賞式(右:孫苗氏)



3F 会場ロビー

編集後記

東美ニュース編集委員長 中島 利充

近年、我が国の美術業界は、国内市場の縮小や担い手不足、情報の非公開性、国際発信力の弱さ等の課題に直面しています。

そのような状況を打開すべく、研修や実践を通して日本の工芸や古美術を国際的な場に発信・流通させるKOGEIGENE育成プロジェクトに、多様な領域から十名の精鋭が選ばれました。

五月二十二日には当社会場でプロジェクトの始動となるKOGEIGENE国際シンポジウムを拝聴しました。今後の発展を大いに期待しております。

東美ニュース編集委員 田島 整
編集事務局 須藤 泰生



入賞作品 1F ロビー展示 (5月27日～31日)